

プリ ボテ

PRIBOTE THE PRINCESS'S PREGNANCY PROJECT

お姫さまデキ婚計画

小説 筆祭競介
挿絵 のりたま

立ち読み版



序章

お姫さまは日本男児がお好み？

006

第一章

姫様来日 金髪碧眼の大和撫子

010

第二章

姫様哀願 私を今すぐ孕ませてください!!

060

第三章

姫様変身 ワンワン姫とボンテージ姫

093

第四章

姫様排卵 私の卵子が貴方の精子を待っています

130

第五章

姫様奉仕 お口でチュパチュパ♥ お乳でヌルヌル♥

163

第六章

姫様臨月 ボテ腹エッチで天国へ

206

終章

そして、お姫さまの腕の中には……

248

登場人物紹介

Characters



セシル=エルステリア

北欧の小国エルステリアから留学してきたお姫さま。日本が大好きで、清楚な佇まいと美しい所作で、あっという間にみんなの人気者になる。ちょっと常識が欠けているところが玉に瑕。



私のことは、どうか気軽に『セシル』とお呼びください。

たけるざきまもる

猛咲護

格闘道場の家で育った男子学生。セシルと恋に落ち、彼女と結ばれるため、子作りに励むことに。

滴るほど愛液を分泌しているとはいえ、急に動けば怪我に繋がる。

護は今にも暴走しかねない、強烈な性衝動を抑えながら慎重に腰を引いた。

『んはああっ……』

上下で繋がる二人の口から、同時に甘い吐息が漏れる。

護はその直後にグッと奥歯を噛みしめていた。

(スゲー！ このヌルヌルしてるのにキツい感覚！)

食い込むようにペニスを引き絞っていた膣壁との摩擦は、身体の芯から眉間に突き抜けるような、強烈な肉悦を逆らせた。

初体験の童貞少年では、この一擦りで果ててしまっても不思議ではない快感量だ。

無論、今こんなことをしているそもそもの目的を考えれば、むしろすぐにイッてしまったほうがいいのかもしれないが――。

(さすがにそれは情けなさすぎるだろ！)

この肉の芯から蕩けるような快感をもっと味わっていたい気持ちもある。

そして何よりセシルにも、ちゃんと女の喜びを感じさせたい。

今終わってしまったら、彼女は痛い思いをしただけになってしまう。

護はジッと金髪碧眼のお姫さまを見下ろしながら、もう一度慎重に腰を動かした。大量の愛液にまみれながら膣壁たちを肉先で掻き分け、男根を深く埋めていく。

その凄まじい抵抗感に、ゾクゾクゾクと背筋が愉悦で震えっぱなしだ。

「んはあ……ま、護さんが私の奥まで、はいって——んはああああ！」

対してセシルの反応は、さらに鋭い。

肉先が彼女の最深部にコツンと当たると、制服の赤いスカートをこちらに突き出すように顎を大きく仰け反らせる。

しかし、甘みのある喘ぎ声から考えて、破瓜時のような痛みのためではなさそうだ。

試しに腰をもう一往復させると——「ツンふああん！」

身体を大きく振るように身悶えてから、再びクタツと全身を脱力させる。

痛みを感じているというよりは、初体験の快感に翻弄されているようなリアクションだ。

護は暴走しそうになる獣欲を必死に抑えながら、ゆっくりと腰の上下を続けていった。

「ああっん……スゴいです！ ずんっ、て。ズンズンって、護さんのが……アアン！ まるでツツくふあん！ 喉の辺りまで届いてるみたいで、あッッ——んっああん！」

セシルはこちらの動きに合わせて、徐々に大きく喘ぎ出した。

自身の身体で発生している肉悦に翻弄されているのか、大きく仰け反っては顔を左右に伏せることを繰り返す。

豊かすぎる胸元はそのたびに、ボタン一つで留めている上着が突っ張り——ピン！
とうとうそのボタンが弾け飛んだ。

下の青シャツは胸の部分だけ皺一つなくパツンと丸く張りつめ、腰回りなどは彼女が身悶えるたびに多くの皺を寄せた。

結合当初はM字に開いていた両足は、今は官能に翻弄されるまま宙を蹴り、時折こちらの腰を締めつけてくる。

そんな中での、パンストに包まれた内腿の感触はまさに絶品。

素肌ではありえないツルツルした独特の肌触りと、その薄皮一枚隔てた奥にある牝脚の官能的な躍動感がたまらない。

思いつきり太股で身体を挟まれながらも、ひっかかりがまるでないため、好きに腰を動かすこともできてしまう。

——ぐちゅん、ジユク、じゅチュ、クチュじゅちゅじゅん！

膣襞たちもただきつく中のペニスを絞るだけではなく、なめらかにくねり出していた。

普段は清楚でお淑やかな姫君は、どうやらとんでもなく性的に高感度な女体の持ち主のようだ。

(うわぁ……。これは……)

そんな中、護の視線を引き寄せたのは、上着のボタンが弾けて下の青シャツが剥き出しになっている彼女の胸元。

下にブラは付けているのだろうが、それが包んでいる柔肉のサイズが大きすぎる。

「終始、胸元だけは皺とは無縁で、彼女を突く動きに合わせてタプンッタプンツとダイナミックに揺れまくる。

その光景を見れば見るほど、この類い稀な巨乳をワシ掴みにしたい思いは募る。

（揉みてえ！ このおっぱいを揉みまくりてえ！）

すでにセックスまでしている仲なのに、いまだこの胸を揉んでいないのは不自然すぎる。このまま何食わぬ顔をしてワシ掴みにしても、何ら問題ない気はするが、護は変なところで生真面目だった。

「……なあ姫さん」

一旦、腰の動きを止めて護は初めて身体を一つにしている恋人に呼びかけた。

「あつ、くふあ……な、何ですか？」

初体験の肉悦に翻弄され、熱く息を乱していた相手がうつとりとこちらを見上げてくる。

「……あのさ……お、おっぱい……揉んでいい？」

護が探り探り口にしたそのセリフに、官能で蕩けていた桃色の美貌がキョトンとする。

その表情を見ただけで、少年は顔から火を吹きそうになった。

「……すまん。今の忘れてくれ」

慌てて子作りを再開しようとした護を制するように、異国の姫が下からこちらの頬をソツと撫でてきた。

「私の胸、護さんの好きにしていいいですよ。ただし——」

「……た、ただし？」

「私のこと名前で呼んでください♥」

そう言つてニコツと笑つたセシルの顔に、護の胸がドキンと弾む。

「……っつゝッッッ」

気恥ずかしくつてたまらない。

が、こんな思いままでして今さら胸を揉まないわけにもいかない。

「……セ、セシル」

「はい♥——ああんっ♥」

彼女の名前を呼ぶと同時に、その気恥ずかしさをごまかすため、小高く盛り上がった胸をワシ掴みにした。

（うわあああ……。やっぱスゲー！）

物凄いボリューム感だった。

シャツの上からでもその桁外れた厚みと、弾力に溢れた柔らかさが実感できる。

「セ、セシル」

もみ。

「セシル」

もみもみ。

「セシル。セシル、セシル！」

もみもみもみもみモミむにゅん！

彼女のファーストネームを連呼しながら、思う存分乳房を揉みしだく。

「ツツツ♥♥♥ ああん♥♥♥ つふああん！」

そんな牡の欲情をストレートにぶつけられても、異国の姫君に嫌悪感は見られない。

むしろ、その喘ぎ声はより甘く、そして熱っぽくなっていく。

何より、ペニスを包む膣壁たちの反応が凄まじい。

名前を呼ぶたび、胸を揉むたび、キュンキュンと敏感に男根を絞り込んでくる。

そのこめかみまで削り込んでくるような性器同士の一体感に、護はグツと奥歯を噛んだ。

切羽詰まり気味なこちらの表情を見て、セシルが切なそうに瞳を細める。

「早く護さんの赤ちゃんが欲しいです。このおっぱいで護さんの赤ちゃんを育てたいです」

この露骨すぎる膣内射精のおねだりが、少年の牡欲を業火に変えた。

「任しとけ！ 俺の濃いのを腹いっぱい出してやる！」

右手でしっかりと乳房をワシ掴みにしたまま、左手で自身の身体を支えて、護はセック

スを再開させた。

片方の胸を掴んでいても、もう片方の豊かな盛り上がりがタプタプと揺れ、男の突入は

嫌でもすぐに加速していく。

「んはああん！ 凄いですうう！ 護さんのがもつと硬く、熱くなって——んはああッ！ おへソの裏側がゴリゴリって——ああッ！ くふあああああッ！」

セシルが激しく喘ぐ。身悶える。

中でも、一番自由に動ける両足のくねりは凄まじい。

こちらの突入に合わせて、黒いパンストに包まれた両足がさらに淫らに宙を漕ぐ。足の甲をいっぱい反らしては、引き締まった脛脛（ふくらはぎ）をビクつかせる。

黒ナイロンの中でギュッと丸まっている左右五本の指先が、時折でたらめな角度にビクンと乱れ、指と指との間の膜を薄くする。

爪先に力が籠るほど、化学繊維が薄くなり肌の白さが透けて見える。

それはまるで黒い網にかかった艶めかしい白魚が、何とかそこから逃れようとしているような光景だった。

——グじゅん！ ぬじゅグちゅ、チュるぐるちゅくちゅッ！

さらに艶めかしく、湿っぽいのは二人の結合部である。

盛大に愛液が飛び散り、サラサラだった金色の茂みが今はべったりとへばりついていて

「もうイクッ！ イキそう！」

「くふあん！ あ、あのイ、イクって……どういうことですかあ？ こんな時にいきなり

どこにイクっていうのですか!?!」

セシルは激しく喘ぎながら、不思議そうにこちらを見詰めてくる。

「イクってのは、セシルの中に、俺の精液を出すって意味だ!」

「ああん! つまりは種付けですね! んはああつ! それなら今すぐイッてください!

私の中に、護さんの赤ちゃんの元をいっばいいっばい注ぎ込んでください!」

あからさますぎるこの中出しおねだりセリフに、頭の奥がカッと燃えた。

肉体だけではなく、意識の隅々までもが官能の業火に焼き尽くされる。

もうイク。本当にイク。

「ああつ! セシル! セシルうううツツ!」

護は絶叫すると同時に一際強く腰を突き入れ動きを止めた。

肉先を恋人の子宮孔に捻じ込むように密着させた状態で、全身がブルリと痙攣。

漲りきった男根の細い尿道内を、内側からブチ抜くように熱い精液が駆け抜けて――。

ドリゅんツツ!

鋭く迸った日本男児のザーメンが、異国の姫君の子宮壁に直撃する。

国も身分も全く違う男女二人が、本当の意味で交わり一つになった瞬間だ。

そして何より、愛液まみれでヌルヌルドロドロの膣襞と直に触れあいながらのナマ射精は、目の前が真っ白になるほどの凄まじい快感だった。

まるで身体の中身が溶け出して、彼女の中に勢いよく迸っていくような解放感である。「んはああああッ！ 熱いの出てます！ ああッ！ 護さんのが私の中でえええッ！」

ドギユン！ どぎゅどぶッッ！ ドリユどぎゅどぶどぶン！

続けざまに迸る灼熱液に身体の内側を直撃され、セシルもビクビクと激しく痙攣する。大きく弓反っているため真上に突き出している右胸が、制服を着たままブルブルと激しく揺れていた。無論、射精を始めても自分の右手が握りっぱなしの左胸は、直にその震えを伝えてくる。

「んはあああッ！ つくひあああ！ あつうッッ！ んくふああああアアアッ！」

セシルは生殖液を注ぎ込まれている間、牡の脈動に合わせて盛大に絶叫し続ける。

「つ……くふあ……つつ……くつくふああ……」

対して護は最後の一滴まで彼女の中に吐き出すと、息まさせていた全身から力が抜けて、ガクッと身体を前に倒した。

射精中は身体の内側で何かが爆発でもしているようにビクビクと痙攣しながら弓反っていたお姫さまも、それに合わせてガクンと背中を落とす。

「ま、まもるさあん」「セシル……」

二人は超至近距離で見詰めあうと、どちらともなく唇を重ねた。優しく舌を絡めあいながら、初体験の余韻を最後まで味わう。



飲んでる。

自分が吐き出したばかりのザーメンを。

「ゴックン……したのか？」

何しろこれは『精飲の儀式』

しかし、そうとわかりきっていても、尋ねずにはいられなかった。

異国の姫君はそれに直接答えずに、こちらに見せつけるようにして、続けて数度コクンこくくん、と喉を上下させた。

「つぶふぁ♥」

セシルは閉じていた瞳をうつとりと開き、再びこちらを見上げてニッコリ。

「これで赤ちゃんに精が付きます」

そしていまだ半立ちのペニスに視線を止める。

「あん。まだ少し残ってます♥」

先端の小穴から白濁の残滓が垂れかかっていたのを目敏く見つけると、彼女は何の躊躇もなく口を開いて再び——ぱくん♥

「ふひゃ!!」

イッたばかりで敏感なため、気の抜けた情けない声を漏らしてしまう。

「そこまでしなくつても——はふうあぁ!!」

セシルの舌は優しく先端の小穴を舐め、尿道内に残った全てを吸い出すためか再び頬を凹ませている。

その度を越えた丹念さは、若い男性器にとつてお掃除フェラの範疇を完全に超えていた。緩みかけていた肉棒の硬度が瞬く間に復活し、恋人の口内で上向きに反りかえっていく。これにはペニスを咥えたままのセシルが、その瞳を驚きで丸くした。

「……時間もまだあるし、もう一回シテもらつていいかな？」

少年のそんなお願いに、セシルは奉仕する喜びの笑みを再びニコツと浮かべる。

「私たちの赤ちゃん。とつても元気に産まれてきそうですね♥」

異国の姫君はすぐに勃起ペニスを咥え直して、その見事なブロンドヘアを再びフワフワと上下させはじめた。

※

初回こそ一週間我慢したが、それ以降は中三〜四日で『精飲の儀式』をすることにした。それでも護の歳と体力を考えれば、かなり我慢をしているほうである。

と、そんなある日の昼休憩。

「……それじゃあ、今日も例のヤツ、シテくれるかな？」

いつもの第三体育倉庫に入るなり、護は制服ズボンをそそくさと脱いだ。しかし、先に待っていたセシルはジトツとした半眼でこちらを見るなり――。

ツン、と横を向いてしまう。

「えっ？　どうかしたのか？」

股間だけを丸出しにしている間抜けな格好で、少年は将来の花嫁に問いかける。するとセシルは不機嫌そうに唇を尖らせて、横目でこちらを睨んできた。

「今日、他のクラスに教育実習に来ている女の先生と随分親しくしてましたね」

「……へ？」

「とてもお綺麗な方でしたね。私と正反対のタイプで、色気があって、艶やかな黒髪の。聞くところによると、護さんが小学生のころのご近所さんで、同じ通学団だったとか」

そのトゲトゲした口調から、何だか物凄く誤解してる雰囲気っぽいのだが……。
しかし護が言葉を挟む間もなく、ブンブンモードなお姫さまの言葉は続く。

「そんな年上の幼馴染みさんに、私にも向けたことのないような笑顔をしました。もうバカみたいにデレデレで、照れ照れな笑顔でした」

「あの……セシル？　それはだな……」

確かに彼女の言う通りの顔をしていたかもしれない。

しかし、それにはちゃんと理由がある。

あの時は別に昔話をしていたわけではなく、セシルのことを話していたのだ。
年上で幼馴染みのお姉さんに、恋人とのことを冷やかされたら、そんな顔になってしま

うのも当然ではないか。

がセシルは生真面目な性格をしているだけに、思い込みがメチャクチャ激しい。

「言い訳は聞きたくありません！」

こちらの言い分には聞く耳持たず、再びツンと顎を反らしてしまう。

「儀式のルールでは、以前護さんが言っていたように、私が精液を受け止めるだけでいいんですから、わざわざ私がお口でしてあげる必要はありません。勝手にそこでシコシコしてください」

「……マジかよ」

今日もたつぷりチュパチュパしてもらおうと、メチャクチャ楽しみにしてたのに――。

(しかしセシルって、本当にヤキモチ焼きだよな……)

それだけ自分に惚れているのだと思うと、それはそれで悪い気はしない。

頬をぷーと膨らませている今の顔など、純粹に可愛く見える。

「時間もありませんから、サッサとしてください」

相変わらずご機嫌斜めな恋人に対し「わかったよ」と答え、出しっぱなしのペニスを掴

んで自慰を始めた。

(でも……これはさすがにちよっと、むなしすぎる気が……)

目の前に類い稀な美貌とプロポーションの(オマケにサービスピス精神旺盛な)恋人がいる

というのに、何でオナニーで済ませなければいけないのだ。

「あのさ……せめておっぱいだけでも触らせてくれねーか？」

セシルがムツとした半眼で睨んでくるが、護はなおも言葉が続ける。

「男ってそーいうもんなんだよ。なっ。頼む。ちよつとモミモミするだけだから」
するとセシルは今までと比べ物にならない鋭さでギンツとこちらを睨んできた。

「そんな嘘で私をごまかせると思ってるなら大間違いですよ！ 浮気も一緒です！ 私にはすぐにバレてしまうんですからね！」

「……だから俺、浮気なんてしてねえって」

「護さん！」

「わ、わかったよ！ ごめん！ ホントごめん！」

結局、平謝りに謝ることになった。

そんなこちらの態度に多少は溜飲を下げたのか、セシルはムツとした表情をしながらも、多少、態度を軟化させる。

「……仕方ありませんね。時間もないことですし、特別におっぱいだけは見せてあげます——ただし！ 見せるだけですよ！ お触り厳禁ですからね！」

「はい。わかりました！」

いったい『お触り』なんて言葉の使い方をどうやって覚えたのか疑問だったが、今さら

彼女の驚異的な学習能力に驚いても始まらない。

セシルは自ら制服の上着に手をかけると、手際よく脱ぎはじめた。赤いスカートはそのままだ、パツパツに張りつめている青シャツのボタンを外しはじめた。

生足を見せるケースと違い、今のセシルは護に対して胸を見せることに関してはそれほど恥じらないようだ。

中から出てきたブラを躊躇なく外して、その学生離れた巨乳を露出させる。

(それにしてもコイツって、身体はちっこいくせに……スゲーおっぱいしてるよな……) 久々に目にしたせいだろうか。

それとも赤子を宿したことにより、本来の目的の準備で張ってきているのか。以前よりも、さらに大きくなった気がする。

たっぷりと肉厚な下乳はさらに豊かさを増し、その丸みは今にもはち切れんばかり。

それでいて彼女がほんの僅か動いただけで、たぶんだぶん、と敏感に揺れる柔らかさはそのままだ。

(た、たまんねえ……)

護はその光景を前にして、股間の肉棒が急激に充血していった。

バストを丸出しにしている妊娠美少女と、その妊娠をさせた少年が勃起して向かいあっている——かなり異様な、そしてある意味間抜けな光景だ。

するとヤキモチ焼きな花嫁は、拗ねた顔のまま口を開いた。

「……今日、実はおっぱいでシテあげるつもりだったんですよ」

「えっ？ おっぱいで……する？」

「お母さまにやり方も教えてきてもらっていたんです」

するとセシルは唇を尖らせた表情のまま、ポーチから小さなプラスチック容器を取り出した。

それは使いきりのシャンプーやリンスを入れる容器のようなミニサイズ。

異国の姫君はそのキャップを外し、中から透明でトロみの強い液体を掌に出した。

「ローションを、こうして——」

そうして、自らの胸にそれを塗りつけはじめる。

セシルの細い指の間で、ただでさえ柔らかな乳房がヌルンぷるんとなめらかに躍る。

（うわあ。何だよコレ……むちゃくちゃエロお……）

もともときめ細かな乳房がローションによって照り光り、たつぷりとした下乳の曲面が卑猥な光沢を放つ。

「このおっぱいで護さんのを挟んであげるつもりだったんですよ」

「マジで!? 挟んで！ 今すぐズニユツと！」

「……それなのに、他のおっぱいに浮気して」

「だ、だから俺は浮気なんてしてねえって……」

「護さん」

再び頬を膨らませる（やけに可愛い）ポンポン顔の恋人に対し、

「あ、はい。すみません。ごめんなさい。もう二度と浮気しません」

少年は再度平謝り。しかし、内心では――。

（こんな可愛いヤキモチ顔が見れるなら、たまに疑われるのも悪くないかも）

と彼女が聞いたら、激怒しかねないことを考えていた。

しかし表面上はしっかりと反省している護に対し、彼女もやっと許す気になったようだ。

「……それじゃあ……もう二度と他のおっぱいに浮気しないように、私のおっぱいが一番

だって教えてあげます」

そう言うのと彼女自ら体操マットの上で横になった。

ローションの入っていたミニ容器を再び手に取り、すでにヌルヌル状態のバスタの谷間

にたっぷりとそれを絞り出す。

そうして自らローションまみれにした乳房を脇からすくい寄せあわせた。

「どうぞ♥」

清楚な美貌にはお腹を空かした子供に食事を恵むような慈愛を浮かべ、そのすぐ下ではポリリユーム感満点のヌルテカ巨乳を捧げている。

たとえまだ性に目覚めていない空腹の幼児でも、これを見たら目の前の乳肉に食欲とは違う欲求でむしゃぶりつくに違いない。

そんな牡の官能を無理矢理掻き立てるような光景に、護の理性を司る部分がバチンと火花を散らしてショートした。

「セシルうっ！」

妊娠腹に尻を落とさないように注意しながら、人生最速のスピードでセシルを跨ぎマウント。ポジションを取る。

そして股間の猛りをその卑猥極まりない盛り上がり差し向けた。

お姫さま自らが寄せあわせてくれている柔肉の狭間に、剛直を一気に突き込む。

ぬるるるるん！

ただでさえなめらかな乳肌がツユダク状態のローションで豪快に滑り、先端から根元まで満遍なく素晴らしい圧力に包まれる。

「くふふあ……。何だよこのフワトロな気持ちよさは……。カンペキに想像以上」

視線を下に向けると、官能的に照り光る二つの美巨乳でむっちり盛りがついていた。

この中に自分が埋まっている。

挟まっている。

そう思うだけで、さらにペニスが漲っていく。

ヌルヌルの牝肉に絞られるのはセックスと同じだが、これはまた一味違う肉悦だ。膣と違い複雑な構造はしていないが、柔らかさに特化した肉の感触はとても心地よい。呆けた顔で口が自然と半開きとなり、唇の端からだらしなく涎を垂らしてしまう。

「そんな気持ちいいんですか？ それではもつと……」

セシル自らが小刻みに乳房を揺すり出してくれた。

ヌルヌルンのバストに、丸ごと男根を包まれたまま扱かれる快感は格別だ。

どれだけ激しく竿肌を擦られても、無粋なひっかけりをまるで感じない。

豊かに実った柔肉のもたらす愉悦だけが、中のペニスに圧縮されてもたらされる。

（それに、この見た目のエロさもたまんねえ！）

セシル自ら細い指をいっぱいに開いてそれをバストに深く埋め、献身的に奉仕してくれる姿勢が男心をさらにくすぐる。

加えて、超敏感体質のお姫さまは、自らの乳奉仕で「ハアハア」と息を乱していた。

先ほどまでの、唇を尖らせプンプンしていた時とのギャップに獣欲がさらに昂る。

「俺も動くぞ——つくあああ……ス、スゲツツ」

一方的に奉仕されるだけだった少年も、腰を前後に動かしはじめた。

彼女のお腹に万が一にも腰を落とさないよう、両手を体操マットについて前のめりの姿勢となり、自分をきつく押し挟むバストに向かって腰を突く。

「ああん♥ 護さんの硬いのが、私のおっぱいの中で動いてます♥」

凄まじい圧力が左右からかかっているにもかかわらず、どれほど動いても摩擦感がほとんどない。にゆるるる、とローションにまみれた柔肉の中を好き勝手に突き進める。

本来、肉同士を擦りあわせる際に発生する痛みはまるでなく、ただただ柔らかな乳房に包まれている愉悅だけがペニス全面で巻き起こっていた。

加えて、下腹にあたる下乳の柔らかさと弾力も腰の動きを加速させ、

——ダブダブだぶだぶだぶだぶダブダブだぶん！

瞬く間に二つの盛り上がりが激しく揺れ出す。

セシルが両手をいっぱいにおいて脇からバストを捧げてくれているのだが、何しろそのサイズが大きすぎてカバーしきれていない。

溢れ出た乳肉がさらにダイナミックにダブダブと弾み、その光景は文字通り、乳房との性交そのものと化していた。

その凄まじい肉悦と視覚的な刺激によって、思わず暴発しないように膝立ちの姿勢でグツと踏ん張りながら、パイズリ行為に没頭する。

「ああん！ 凄いです！ 護さんが私の中でガチガチのピキピキでえ！ こんなに激しく内側から擦られると私まで——ああん！ ああアあああん！」

セシルの口から漏れるのも、まるでセックスしているような激しい喘ぎ声。



目の前には、もういつ生まれてもおかしくないほど大きく盛り上がった臨月腹。

この神秘的なフォルムを目の前にしたら、男はどうしたってビビッてしまう。

何しろこの中には、まだ産まれる前の命が宿っているのだ。

ちよつとしたことで傷つけてしまうんじゃないかと腰が引ける。

しかしそんな自分にお構いなく、子を宿す母親は至って自然体。

「心配しなくても、この子はパパに似てとっても丈夫ですから」

自らの腹部を優しく撫でながらニコッと微笑んできた。

それでもなお腰の引けている未来の夫に対し、セシルは手を取り自らポテ腹の上に導く。

「うわああ……こ、これは……」

掌で触れた丸みに息を飲む。

同じ部位が膨れた肥満腹と、明らかに違うのはその肉の張りだ。

全くブヨブヨしておらず、そのパンと張りつめた感触はとても心地よい。

いや、力強い。ある意味、生命力に溢れている。そして――。

「おおっ!!」

突発的な振動が掌に響いてきた。

どれほど筋肉を自在に操れる者でも、こんなことはできないはずだ。

「い、今のってひよつとして……」

「赤ちゃんが蹴ったんです。この子、護さんに似て、元気いっぱいなんですよ」

「おお……おおお……」

言葉にならない感動に全身が震えた。

改めて実感した。彼女の身体に新しい生命が宿っていることを。

しかもその命には、自分の血が流れているのだ。

（なんかたまねえな……それって……）

この美しいお姫さまの全てが自分のモノになったような、本当の意味での独占感。

征服感にも似たこの誇らしい感覚は、恋人のポテ腹姿を見なければ実感できないものかもしれない。

すると今まで弱腰だった牡の部分が、途端に元気を復活させ股間が急に漲ってきた。

（お、男って……なんか罪深いな……）

教会の中にいるためか、柄にもなくそんなことを思ってしまう。

しかし頭と身体は別物だ。一ヶ月抜いていないだけに一度スイッチが入ってしまうと、ペニスはずぐに剛直する。

「そ、そんじゃあ……は、始めるぞ」

「はい」

多少震え気味な護の宣言に、セシルはおっとりとして頷いた。

今からするのはただの妊婦さんエッチではない。

エルステリアの王族が、神に新たな子の審判を受ける『神子の儀式』だ。古くからの儀式のため、もちろんコンドームの使用は許されていない。

この点に関してだけは、セシルを担当している産婦人科の女医に「早産の危険がある」と反対されているが、科学や医学に反しても貫かなきゃいけないものがこの世にはある。護は彼女の薄い儀式服の裾を掴み、ゆっくりと捲っていった。

そして下から現れる、ぽっこりと膨れた腹を優しく撫でながらチュツとキスをする。

「あん♥」

妊婦になつても、セシルの感度は変わらないようだ。

護は腹筋が薄く引き延ばされたポテ腹を、その独特の感触を確かめるように舐めていく。二人で一生懸命子作りしていた時は美しく縦に走っていたヘソが、今は内側から盛り上がり、底の浅い丸い窪みとなっていた。

少年はすぐにそこに狙いを定め、ヘソの形や深さを確かめるように舌を這わせる。

「はあんっ。そ、そこは……ああん、ちよっとくすぐりたいです」

とセシルは言いながらも、その声は官能に甘く震えていた。

くすぐりたいのは事実だろうが、性的な気持ちよさも同時に感じているようだ。

それがわかった少年は舌先に意識を集中させ、窪みを弾くようにレロレロと舐め続けた。

「んっ、ああん。もう護さんったら……そんなところばかり——ああん！」
身重でなければ身体をよじっていたのだろうが、今の彼女はそれができない。

護はたつぷりとセシルに甘い声を出させてから、ヘソから垂れた己の涎を拭うように妊娠腹の球面を何度も舐め上げた。

このすぐ奥に、自分の子供がいる。

そう思うと、今まで感じたこのない愛おしさが込み上げてきて、無意識に強くキスマまでしてしまう。すると——。

「だめです。そんなに強くキスをしたら、跡が残ってしまいます。……せ、先生に見られて……恥ずかしいです」

先生とは、産婦人科の医者のことだろう。

中年の女医さんで、もちろん護も顔見知りだ。今回の儀式のために、医学的なアドバイスをいろいろと受けてたりしている。

それだけに、今度顔を合わせた時にニヤニヤされるかとも思ったが、生温かい視線に囲まれることならば東乃園学園時代に慣れてる。

当時、セシルは全然気にしておらず、自分だけが恥ずかしい思いをした。

しかし、このキスマークに関しては、さすがのお姫さまも恥ずかしいらしい。

(……………いいかも♡)

だからこそ、さらに強く吸いついた。

女医さんにキスマークだらけのポテ腹を見られ、顔を真っ赤にするセシルを想像するとますます強く吸いついてしまう。

護はかつて彼女の乳房をそうしたように、点々とキスマークを刻んでいった。

このポテ腹は俺のものなんだ、という所有印の意味も込めて。

そうして護は散々恋人の臨月腹をねぶり尽くしてから、視線をさらに下に向けた。

彼女の美脚は太股まである白のストッキングに包まれている。

「これ……脱がしていいよな？」

「えっ!? で、でもお……」

ここまできても、やはり生足を見られることに関してだけは特別の羞恥があるようだ。

護としてはストッキングを履いたままするのもいいのだが、脱いだ時のほうがさらに彼女の感度が上がったことをよく覚えている。

あの時の、セシルの抱き心地は最高だった。

「この子ができた時にも脱いでシタしさ。ゲン担ぎだよ、ゲン担ぎ」

「……ううう……わ、わかりました」

渋る姫さまをそんな理由で強引に説得し、護はストッキングに手をかけた。

先ほどのポテ腹キスマーク責めといい、どうも自分は、好きになった女の子が恥ずかし

がすることをしたい性分らしい。

セシルは今にも産まれそうな臨月腹をしているくせに、子供のようにキュッと下唇を噛み、顔は耳まで真っ赤。左右の足からストッキングを抜く際には、たったそれだけのこと

で、指先がヒクンと官能的に震えたほどだ。

(相変わらず……綺麗な生足してんなあ)
身重で祈りを捧げる毎日を送っていただけに、あまり歩いていかなかっただろうが、健康

的な美脚は健在だった。
引き締まった太股も、脹脛の盛り上がりも、やつれは見えずとても美しく伸びやかだ。
脚肌の白さやきめ細かさに至っては、さらに磨きがかかって見える。

護はたつぷりと彼女の生足を鑑賞してから、スベスベの膝小僧を両手で掴みゆつくりそれを開かせた。

「うおお……」

久しぶりに見るセシルのそこは、金色のデルタ地帯がさらに豊かにフサッと茂り、牝華も明らかに成熟していた。

かつて大陰唇の隙間からチラッとしか見えなかった桜色の花卉が、今まさに咲き誇ろうと幾重にも中から覗いている。

(もう、ヌレヌレになってるよ……)

それでいて、以前と変わらないのはその濡れっぷりだ。

ヴァギナにはまだ直接何も愛撫を与えていないのに、ポテ腹責めや生足露出だけで、すでに前戯が必要ないほどである。

「相変わらず、スゲー濡れっぷりだな」

思わず漏れた護のセリフに、セシルはますます頬を赤らめた。

そして彼女が恥じらえば恥じらうほど、少年の股間は猛りを強める。

護は改めて体勢を整え、すでにビキビキに勃起しているペニスを彼女の入り口——そして我が子の出口へと差し向けた。

「ああん♥ ひ、久しぶりの護さんです——あふはああ……」

肉先がヴァギナの中心に触れると、セシルがいつも以上に熱の籠った吐息を漏らす。

思えば彼女を抱くのは、この子を孕んだあの学園祭以来である。

ぬずるるる、と慎重に埋め込んでいくペニスにもたらされる蕩けるような肉悦に、

(ヤベツ!! 気を抜いたら、気持ちよすぎてすぐにイッチまうぞコレ!!)

護は暴発しないよう全力で奥歯を噛みしめた。

(久しぶりだからか? 何かいつも以上に色んな意味で濃いような?)

竿肌に絡みつく膣襞の絞り具合だけではなく、蜜液の粘度や匂いまでもが以前に比べて濃く感じる。

そういえば、この儀式のことを女医さんに相談したところ『妊娠中は膣内の分泌物が増えるから、いろいろと変化するわよ』と教えてもらったことを思い出す。

確かにその通りだ。明確に以前とヴァギナの感触が違う。

ただ愛液の粘度が前よりも濃いだけではなく、肉先が膣壁を掻き分けていく時の抵抗感から違っていた。

「くわああ……。す、すげえ……」

根元までしつかりと埋めきつた際、ペニスにかかる想定以上の圧力に、護はたまらず深い吐息を漏らしていた。

牝肉がより詰まっているような感触に加え、どっしりとした安定感がある。

(まあ、それは当然だよな……)

何しろこの見事なボテ腹だ。セシルの元の小柄な体格を考えると、赤ちゃんの分だけでも体重がかなりの割合で増えている。

「んっ……。つふああああ……。護さんが……。届いてますう」

護の肉先が膨張しきつている子宮の入り口まで到達すると、セシルが艶やかな喘ぎ声と共にうっとりとしたこちらを見上げてきた。

儀式のルールでは、お腹の中の赤ちゃんを神さまに見せるため、ちゃんと妊婦をイカセなくてはならない。

実は行為を始める前は、ポテ腹でちゃんと感じるのか少し心配していたが、この超高感度なら問題は全くなさそうだ。

それどころか、もとより抜群だった女体の感度が今はさらによくなくなってきている気がする。目の前にある剥き出しの膝小僧にキスをする、足先の指をキュッと丸めて、脹脛を官能的に盛り上げた。

「ひよっとして、前より感じてる？」

護の問いに、セシルは恥ずかしそうにコクンと頷いた。

「……久しぶりですし……。ずっと、この日を……た、楽しみにしてましたから」

恥じらいながらも、サラッと大胆な発言をするのはいつものセシルである。

「俺のペニスが恋しかったんだ？」

「……い、意地悪な言い方しないでください……護さんが恋しかったです——ああん♥」

言い繕おうとした妻の口を、若い夫はゆっくりと腰を突いて封じ込めた。

（うおおおっ……。こ、これは!?!）

文字通り身重になっただけ、やはりセックス時の安定感がまるで違う。

横になった女体がブレないだけに、男根を突き込んだ時の反発力がかなり大きい。

（今までのスレンダーな時の俺の動きに翻弄されちゃう感じもよかったけど……このどつしりとしているのもかなりいいな）

それでいて膣壁はキツすぎず、濃密な愛液でヌルヌルのトロトロだ。なので、なおさしみつちりと詰まった牝肉を、亀頭が搔き分けていく時の突入感がたまらない。

護は気持ちよすぎて獣欲を暴走させないように注意しながら、腰を前後し続ける。

「お腹、大丈夫か？」

あまり前のめりになって、彼女の腹に負担をかけないようにしているが、こればかりは確認しないとわからない。

「はい。だ、大丈夫です——ンはっ……ああんっ……このまま続けてください」

と身重なお姫さまは甘く喘ぎながら、こちらを安心させようにつこり。

妊娠腹を気遣いながらのセックスは、互いをより気遣いあう効果があるようだ。

変に照れることもなく、今まで以上に確かな絆を感じられる。

それだけに彼女を求める狂おしいほどの情熱が、腹の底から湧き上がってきた。

（ヤベッ!! 暴走するなよ。暴走しちゃ絶対にだめだぞ!）

護は彼女を激しく突き上げないように注意しながら、腰の動きに意識を集中していった。この煮え立つような激情を何とかコントロールして、儀式のルールに則り母体を天国に導くためである。

「あっ……んああああん! ソ、ソコ……感じちゃいます——あああああん!」
ヴァギナに入ってすぐの天井にあるコリッとした部分に、肉傘の盛り上がりに合わせて

執拗に擦り続けていると、セシルが甲高い声で喘ぎ出した。

「何度も身体を重ねた経験から、彼女のウィークポイントは熟知している。

「そんなにイイか？ それじゃあ、次はこれでどうだ？」

予想以上に敏感な相手の反応に、護は声を興奮で上擦らせながら、男根を根元まできっちり彼女の中に埋め込んだ。

そして先端を子宮孔の入り口に擦りつけるようにクリクリと小刻みに腰を揺すつてから、又ずるるルつ、と肉傘のでっぱりで膣壁たちを掻き出すように腰を引く。

これもセシルの身体が大好きな責め方だ。

「凄いですう！ 護さんがお腹の中まで届いてるみたいで——あぁんっ！」

護は彼女の生足を両手で抱くようにしながら、ねちっこく腰を突き続けた。

彼女を確実にイカすため。若い獣欲を暴走させないため。何より臨月腹に過度の負担をかけないため、ねっとりとしたスローセックスを心がける。が。

（うわああああ！ セシルがあんなにカンジまくってる！ た、たまんねえよお！）
護だつて久しぶりのセックスだ。

思いっきり腰を突きまくり、何度も若い獣欲を思うさま発散させたくなる。

そのたびにセシルの胸をワシ掴みにして張りつめたバストの感触を楽しみ、キスマークまみれのポテ腹を彼女の名前を呼びながら優しく撫でて、何とか気持ち落ち着かせた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評発売中

男の子と女の子——
二つの性の間で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

「小説・大熊理喜 / 挿絵・大空樹」



目覚めると
従姉妹を護る
美少女剣士になっていた

「小説・狩野景 / 挿絵・天鬼とろり」

全国書店で
好評発売中

「小説・大熊理喜 / 挿絵・大空樹」



全国書店で
好評発売中

**凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に墮とす
新たな敵の登場!**

「小説・蒼井村正 / 挿絵・或十せねか」



平凡な少年が女体化!
鬼に狙われた従姉妹を護れ!!

「小説・大熊理喜 / 挿絵・大空樹」

既刊LINEUP

- 仙遊字盤戦姫 / ノナガリ ①～③
- ビルグリムメイデン ①～③

全国書店で好評発売中

- 思春期なアダム ①～④
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のカイイ証設計画!
- 借金お嬢クリス ①～④
- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!